

弥生墓の発掘

むきばんだやよい塾 塾長 藤田憲司

島根半島の弥生墓

久しぶりに島根県の弥生墓の発掘情報に接した。朝酌川と大橋川の合流点付近の島根半島側にある朝酌矢田Ⅱ遺跡のことだ。前期と後期の墳墓が発掘されている。大橋川を挟んで南岸にあたる矢田地域には数基の四隅突出墓が知られていたが、島根半島側の四隅突出墓は沢下遺跡以外知らなかったのもので、個人的にも再考する機会を頂いた。

7月のやよい塾講師の椿さんによると、朝酌矢田Ⅱ遺跡の近くでは出雲国風土記に登場する朝酌の渡し（波止場）の遺構が発掘されているとのこと。弥生時代を中心に6世紀以前だけに関心を寄せていたわたしは、出雲国風土記の記述に当たる遺構が発掘されているこの地域の重要性をにわかには理解できなかった。

朝酌矢田Ⅱ遺跡の四隅突出墓は、後に出雲国庁から隠岐へと築かれた官道の傍に位置しているとのこと。どうやら四隅突出墓が築かれたこの地は、後々まで大橋川を挟んで南北だけでなく、東西に往来する要の場所だったようだ。もちろん、弥生時代後期から官道があったというのではなく、出雲世界を往来する要衝の地という意味だ。交通の要所付近に墳墓が築かれている事例は、「古墳（前方後円墳）時代」には各地で認められる。

発掘現場（担当者）の葛藤

椿さんの講義で、受講者の皆さんにぜひ心にとめていただきたいことがある。朝酌矢田Ⅱ遺跡の調査は、足掛け7年にわたり4次におよぶ発掘調査が行われた。今回椿さんが紹介くださった第3次と第4次の調査は、諸般の事情によって隣り合う場所で調査区域が設定されたようだ。結果的に、一つの遺構（墓）を一度に発掘できず、2年次にわたって別々に発掘され、第4次調査によって、第3次調査で発掘された遺構が一つの四隅突出墓の一部であることが分かったとのこと。

その調査経過の紹介で、椿さんは担当された第3次調査で四隅突出墓の墳端施設の痕跡だったことを見抜けなかったと、反省の言葉を交えて語った。調査担当者の発掘現場での葛藤を生で伺えることはめったにないが、調査者に落ち度はない。各時代の土器が混在し遺構の性格も時期認定もままならない痕跡を、細部まで丁寧に記録していたことに、むしろ敬意を払いたい。調査区の地形条件、発掘の結果明らかになった地滑り痕、後世の削平改変があったのだから、弥生後期土器がわずかしき出土していない遺構を四隅突出墓の墳端部と即断する方が危うい。

発掘経験者の立場でいうが、この調査整理に関して、担当者の大変な努力が払われていることを知ってほしい。一つは、四隅突出墓墳端部と判明した遺構の下位斜面で検出した石積遺構の解析だ。伴出遺物がないのに、なぜ弥生前期の墓と認定できたのか。

弥生前期の墓があった場所は傾斜地だ。遺構を覆う堆積層は薄く、層位的観点や出土遺物から遺構（墓）の年代を明らかにすることはできない。幾つもの石が集められた下に箱型の掘り込み痕があった。経験的に判断すると墓に違いないのだが、共伴遺物がないので墓の時期は拙速に判断できない。椿さんは、同類の墓を島根半島内だけでなく九州・韓半島に視野を広げて検討し、弥生前期の墓と認定したとのこと。簡単に諦めない研究者としての矜持をみる思いだ。

もう一つ、第3次調査で四隅突出墓の墳端部と判断するのは、ほぼ不可能だ。2年後の第4次調査の成果によって、四隅突出墓の墳端遺構と判明した。どのような遺構の一端か分からなくとも、正確に調査結果を記録したことで、本来の遺構を再現できたのだ。発掘現場では、誰しも自問自答しながら、精一杯の情報を記録して、後々の調査情報と対比できるようにしている。記録保存に臨む調査担当者の努力を理解してほしい。

なぜ、そこが墓地に選ばれたのか

椿さんが示してくれた島根半島の四隅突出墓の分布をみると、それぞれが単独的に築かれている。朝酌矢田Ⅱ遺跡の四隅突出墓も、同様に単独的に築かれたように見える。椿さんは明言しなかったが、大橋川の渡し、朝酌「矢田」の川向（南側）も「矢田」と呼ばれる地区があり、その地に中・小規模の四隅突出墓があることに注目した。出雲国庁の南の丘陵部でも四隅突出墓が新しく（わたしが知らなかっただけ）確認されたとのこと。朝酌矢田Ⅱ遺跡の四隅突出墓は、南岸のグループと一緒に考える方がよいのかも知れない。

十数年前、山陰の四隅突出墓を中心に拙考を発表したとき、出雲世界では四隅突出墓の集中地帯は、出雲平野と安来平野の二か所だった。今回椿さんの講義を拝聴して、のちに国庁が置かれた松江市山代・矢田地域も、規模は劣るものの出雲にもう一つ四隅突出墓集中地域があったことを知った。

出雲平野と安来平野にある四隅突出墓は平野部南奥の丘陵部にあるが、矢田地域の四隅突出墓は大橋川近くに築かれている。大橋川の矢田地区は、東西に大量の物資を運ぶ水運にとって、まさしく朝酌の関（所）に当たる。その地域に築かれた四隅突出墓は、出雲地域では第三ランクの規模の墓だ。そのことを出雲世界の弥生墓の中でどのように解釈すればよいのか、これからの課題であろう。

階層化が進んだ弥生後期の特定階層墓がどの場所に築かれたのかという課題は、問わず語らずに見過ごされてきたように思う。前方後円墳の時代には、各地の海路・陸路の交通の要所に前方後円墳が築かれている。弥生時代の出雲世界では……。課題はつきない。